

教師のあるべき姿について
—アンケート比較から見た3つの視点の差異に関して—

京都教育大学大学院 連合教職実践研究科
教職実践専攻 生徒指導力高度化コース
156049 富原 由彦

教師のあるべき姿について

—アンケート比較から見た3つの視点の差異に関して—

富原 由彦

生徒指導力高度化コース

要約：本研究では、教師のあるべき姿についてアンケート調査を実施した。その結果、子ども理解、授業、学習指導案、人間性の4項目のニーズについて、教職員、学部卒院生、中学生の間で大きな差異がみられた。一方で教職員、学部卒院生、中学生の理想とする教師には「教師としての総合的な人間力」が共通することが分かった。

「教師としての総合的な人間力」を形成していくためには、教師としてそれぞれが揺るぎない軸を持ちながらも、社会の急激な変化に併せて様々な人やモノに出逢い、様々なことを経験し、価値観や意見をぶつけ合うといったことを日常的に行うことが必要である。教職員は全ての項目を重要と考えているが、授業や子ども理解は人間性に比べると優先されていないため、教師と大学生や子どもが考える教師像に差異があることを理解し、優先されていないものに留意しながら“学び続ける”という意識を持つことが重要である。

キーワード：理想の教師像、資質能力、人間力、中学生、大学院生、教職員

1.問題と目的

1.1 研究の背景

現代の子どもを取り巻く環境は、国際化、情報化、少子高齢化といった社会の急激な変化に伴って、日々変化している。そのため、様々な教育課題に対応できる教育実践力を備えた教師が学校現場では求められている。そのような中、教員の資質能力についての指針が国や地方自治体によって示されている。例えば、中央教育審議会答申(2012)「教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について」では、これからの教員に求められる資質能力について、表1のように示されている。

これらの資質能力はいずれも教員として必要なものであると筆者は考える。しかし“形成されることに”とあるように、必ずしもすべての能力をはじめから備えている教員は多くはないであろうと考えられる。それでも教員はこれらの資質能力のいずれかを自らの教

師としての軸として持っているはずである。筆者は教職専門実習Ⅰ・Ⅱにおいて、授業や部活動、生徒指導など先生によって力を入れている業務が異なると感じた。この力を入れている業務こそが教師としての軸であると考えられる。この“軸”は、自分がどういう教師でありたいかや、なっていきたいかといった教師像の捉え方へと繋がっていると考えられる。教師像についての考えは、教育を受ける、教育をするというように、教師をみつめる視点が違えば考え方や捉え方が全く異なるため、比較した場合何らかの差異が生じることが予想として考えられる。しかし先行研究において、教師像について視点ごとに比較した場合に起こる差異について書かれている論文は少ない。

表1 これからの教員に求められる資質能力（文部科学省）

(i)教職に対する責任感、探究力、教職生活全体を通じて自主的に学び続ける力 (使命感や責任感、教育的愛情)	
(ii)専門職としての高度な知識・技能	
○教科や教職に関する高度な専門的知識(グローバル化、情報化、特別支援教育その他の新たな課題に対応できる知識・技能を含む)	
○新たな学びを展開できる実践的指導力(基礎的・基本的な知識・技能の習得に加えて思考力・判断力・表現力等を育成するため、知識・技能を活用する学習活動や課題探究型の学習、協働的学びなどをデザインできる指導力)	
○教科指導、生徒指導、学級経営等を的確に実践できる力	
(iii)総合的な人間力 (豊かな人間性や社会性、コミュニケーション力、同僚とチームで対応する力、地域や社会の多様な組織等と連携・協働できる力)	
これらは、それぞれ独立して存在するのではなく、 省察する中で相互に関連し合いながら形成されることに留意する必要がある。	

そこで、学校現場で働く教職員やこれから教員になろうとする大学院生、また教育を受ける身である中学生を対象とし、教師として重視していることや教師に求められていることについて生の声を聴くことで、本当に視点ごとの差異が生じているのか、また差異が生じているのであれば、その差異の原因等を考察することで、教師に求められているものを明確にしたいと考え、本主題を設定した。

1.2 問題

近年、理想の教師像についての研究は様々な視点を対象として行われている。そこで本研究で筆者が研究対象とする3つの視点別に、先行研究の一部をまとめることとする。

1.2.1 教職員を対象とした研究

武田ほか（2013）は、A 県の小・中・高等学校新任教員を対象とし、「教職生活を円滑にスタートするために、大学で教育実習後にどのようなことをもっと学んでおきたかったと思うか」という質問について、中央教育審議会が示した授業内容例を参照して9項目からなる質問紙を作成し、調査を行った。その結果、教職経験年数、校種間、性別において有

意な差を見出し、新任教員のニーズの特徴を明らかにした。

山根・木多(2013)は、岡山市内の幼稚園・小学校・中学校・高等学校及び特別支援学校の校長等に行った「理想の教師像」についてのインタビューにおける発言内容を分析し、新採用教員等若い教員に求める資質能力を明らかにした。また、校種間比較を行った結果、全校種の学校長等が重要であると考えている資質能力は、「総合的な人間力」のうちの「豊かな人間性や社会性」及び「コミュニケーション力」であった。幼稚園長・小学校長の発言には、「教職に対する責任感、探究力、教職生活全体を通じて自主的に学び続ける力」に分類された言葉が多かったのに対し、中学校長・高等学校長の発言には、「専門職としての高度な知識・技能」に分類された言葉が多かった。

1.2.2 大学生を対象とした研究

山根ほか(2010)は、教育学部3回生、教育学研究科生、養護教諭特別別科学生合計281名を対象にして、理想の教師像に関する20項目の質問紙法による調査を行った。回答の上位の項目では、「子どもとのコミュニケーションを上手にとることができる先生」「子どもの日々の変化に気づくことができる先生」「子どもの人格を尊重することができる先生」など、理想の教師像では、子どもとの関わりが最も重要であることを明らかにした。

千葉市教育センター(2010)は、2006年度千葉大学教育学部1年162名、2009年度同160名を対象に、教師力をどのように捉えるかについて自由記述で回答させた結果、教師力として重要な項目は第1位に「わかりやすい授業ができる先生」であり、続いて「話がうまい」「ユーモア」「信頼関係」「子どもをよく見る」「コミュニケーション」といった授業に関する項目、教師の人間性や生き方に関する指導力に関する項目が上位になっている。

児玉(2015)は、受講生約300名を対象に「教職概論」(2012)「教職実践演習」(2013・2014)及び京都教育大学連合大学院「授業力高度化実践研究Ⅰ(M1ゼミ)」において「自身の経験を振り返って“理想の教師(好きな先生)”」について、自由記述で回答させた結果、「理想の教師(好きな先生)」についての回答は、表現の差はあるものの“豊かな人間性と高い授業力”を持った教員が理想ということがわかり、このことから文部科学省の求める教員像や各自治体の求める教員像とも一致していることを明らかにした。

1.2.3 子どもを対象とした研究

千葉市教育センター(2010)は、千葉県内の小学生、中学生等、計2942名に質問紙法の調査(28項目)を行い、教師が持つべき資質能力等をまとめた。その結果、小中学生に共通する第1位は「授業がうまい」であり、「気軽に話ができる」「困ったときに頼りにな

る教師」と生活指導に関する項目が上位に選ばれた。

小柴ほか(2014)は、中・高校生 2,161 名を対象とし、1) 生徒が理想とする教師像に関する 20 項目、2) 中央教育審議会による「教職実践演習」授業内容例の 9 つのキーワードをもとにした 9 項目、3) 教職志望の学生に期待することについての自由記述の 3 部構成の質問紙調査を実施した。その結果、中・高校生の理想の教師像は「わかりやすい授業をしてくれる先生」であった。また、教師への要望についての中・高校生の意識比較では、中学生の方が有意に高く、性差の比較では、一つの項目を除いて、中・高校生ともに男子よりも女子の方が有意に高かった。

1.2.4 複数対象での比較

渡辺(2011)は、神奈川県教育委員会と連携して、教員・保護者・小中高生・学校管理者・学校評議委員、合計 10,795 名を対象に調査研究を行った。その結果「わかりやすい授業をする」「児童生徒の理解し適切な指導をする」「児童生徒のやる気を引き出し、意欲を高める」の上位 3 項目は、教員と児童生徒が完全に一致していることを報告している。

豊田・三木(1996)は、112 名の大学生と 157 名の現職教師を対象に、「あなたにとって、理想的な教師の特徴を 5 つ書いて下さい」という質問について自由記述を求めた。その結果、大学生は教師の人間性に関する特徴を重視しているのに対して、現職教師は児童生徒理解を重視していることが示された。また性差に関しては、男子学生は小学校、中学校、高校における理想的教師像の特性に変化が認められたが、女子学生は一貫していた。一方、現職教師では性差はほとんど認められなかった。

1.3 目的

本研究では、大学院生、教職員、中学生の 3 つの視点に着目し、先行研究を参照しアンケート調査を実施、比較する。比較した結果、本当に視点ごとの差異が生じているのか、また差異が生じているのであれば、その差異の原因等を考察することで、教師に求められているものを明確にすることが目的である。

2. 研究の方法

本研究では、「目指す教師像についてのアンケート」と題し、アンケート調査を行った。このアンケートは先行研究で行われたものを参考にし、対象者ごとに内容に編集を加えたものである。(概要は表 2)

表2 アンケート調査概要

調査対象者	A中学校（中学2年生 107名、教職員 14名）、京都連合教職大学院学部卒院生（M1：授業力高度化コース 19名、生徒指導力高度化コース 18名。M2：授業力高度化コース 17名、生徒指導力高度化コース 23名）、現職院生（学校経営力高度化コース）8名
調査方法・期間	院生 11月下旬から12月上旬、各コースの授業前後に実施し、その場で回収。 A中学校 4月下旬に実施
質問項目	中学生 107名 性別、質問3 学部卒院生 77名 性別、学年、希望校種、質問1、2、4 教職員（現職院生を含む）22名 性別、校種、年代、質問1、2、3
質問内容	＜質問1＞あなたの目指す教師とはどのような教師ですか？重要度に応じて、あてはまると思うものに○をつけてください。（とても重要である、やや重要である、どちらともいえない、あまり重要ではない、重要ではない、の5件法。項目は表3） ＜質問2＞質問1について、最も重要なものを1項目、2番目に重要なものを3項目、あまり重要ではないものを3項目、最も重要ではないものを1項目、選んでください。 ＜質問3＞これから教員（先生）になろうとしている人に、どのようなことを頑張ってもらいたいと思いますか？（自由回答） ＜質問4＞今後教員になるにあたり、大学院でどのようなことを頑張ろう（頑張っている）と思いますか？（自由回答）

表3 質問1、2に関する20項目

①わかりやすい授業をする教師	⑪だれからでも学ぼうとする謙虚さをもつ教師
②教職員と協力することができる教師	⑫子どもの人格を尊重する教師
③子どもとのコミュニケーションを上手にとることができる教師	⑬社会の変化にともなう教育課題に対応できる教師
④クラスをまとめることができる教師	⑭授業に全力で取り組む教師
⑤学校のきまりなどをきちんと守らせる教師	⑮教職員と積極的に意見交換をする教師
⑥魅力的な学級・学年・学校行事を計画することができる教師	⑯だれに対しても笑顔で明るくかわる教師
⑦保護者と連携することができる教師	⑰教育にかかわる信念を持っている教師
⑧教材や指導法の研究など自ら学ぶ意欲をもった教師	⑱子どもの成長に喜びを感じる教師
⑨子どもの日々の変化に気づくことができる教師	⑲地域と連携することができる教師
⑩礼儀正しい教師	⑳豊かな教養を備えた教師

3.アンケート調査結果、考察

3.1 質問1（教職員、学部卒院生）

＜学部卒院生と教職員の比較＞（表4）

はじめに学部卒院生と教職員を比較する。各項目の平均点の差についてt検定を行った結果、教職員の度数が少ないため単純に比較することは出来ないが、項目⑱に有意差が認められ、大学院生の方が教職員よりも高かった。一方で、項目⑥、⑪に有意差のある傾向が見られ、教職員の方が大学院生よりも高かった。実習やボランティアという形で学校現場に入ると、子どもが成長したと感じる場面を多々目撃する。この時の感動が項目⑱に影響すると考えられる。教職員も子どもの成長に喜びを感じないわけではないが、長い間学校現場で働く中で、企画、計画の重要性や学び続ける必要性を実感したことが、主に項目

⑥、⑪に反映されていると考えられる。

表 4 学部卒院生と教職員の比較

	大学院生			教職員			平均値の 差の検定	
	平均	SD	順位	平均	SD	順位	t	p<
①わかりやすい授業をする教師	4.69	0.54	2	4.73	0.46	3	-0.306	
②教職員と協力することができる教師	4.62	0.54	6	4.77	0.43	1	-1.195	
③子どもとのコミュニケーションを上手にとることができる教師	4.74	0.59	1	4.77	0.53	1	-0.231	
④クラスをまとめることができる教師	4.44	0.68	9	4.50	0.74	9	-0.349	
⑤学校のきまりなどをきちんと守らせる教師	4.14	0.72	19	4.27	0.70	15	-0.750	
⑥魅力的な学級・学年・学校行事を計画することができる教師	4.18	0.79	18	4.50	0.60	9	-1.749	0.10
⑦保護者と連携することができる教師	4.68	0.59	3	4.59	0.50	8	0.606	
⑧教材や指導法の研究など自ら学ぶ意欲をもった教師	4.55	0.74	8	4.64	0.49	7	-0.545	
⑨子どもの日々の変化に気づくことができる教師	4.61	0.63	7	4.73	0.70	3	-0.747	
⑩礼儀正しい教師	4.26	0.86	17	4.14	0.71	18	0.612	
⑪だれからでも学ぼうとする謙虚さをもつ教師	4.42	0.71	10	4.73	0.46	3	-1.935	0.10
⑫子どもの人格を尊重する教師	4.64	0.63	4	4.73	0.46	3	-0.633	
⑬社会の変化にともなう教育課題に対応できる教師	4.38	0.67	12	4.32	0.78	14	0.348	
⑭授業に全力で取り組む教師	4.42	0.85	10	4.50	0.51	9	-0.443	
⑮教職員と積極的に意見交換をする教師	4.35	0.81	14	4.50	0.60	9	-0.806	
⑯だれに対しても笑顔で明るくかわる教師	4.05	0.96	20	4.09	0.87	19	-0.172	
⑰教育にかかわる信念を持っている教師	4.31	0.78	15	4.41	0.96	13	-0.489	
⑱子どもの成長に喜びを感じる教師	4.64	0.58	4	4.27	0.98	15	2.180	0.05
⑲地域と連携することができる教師	4.27	0.79	16	4.00	1.11	20	1.298	
⑳豊かな教養を備えた教師	4.36	0.65	13	4.23	0.69	17	0.860	

＜学部卒院生の男女比較＞（表 5）

次に学部卒院生の性差について比較する。それぞれの平均値の順位を見ると、男性は項目③子どもとのコミュニケーションを上手にとることができる教師、⑨子どもの日々の変化に気づくことができる教師、⑫子どもの人格を尊重する教師といった項目が上位に入っていることから、子どもとのかかわりを重視しているのに対し、女性は子どもとのかかわりだけでなく、項目②教職員と協力することができる教師、⑦保護者と連携することができる教師が上位に入っていることから、協力、協働することも重視していることが分かる。また、項目⑤を除くすべての項目について女性の方が得点平均値は高かった。小柴ほか(2014)の中・高校生を対象とした研究、武田ほか(2013)の新任教員を対象とした研究でも同様に女性の方がニーズは高いという結果が出ており、女性の方が教師に対するニーズが高いことが分かる。さらに各項目の平均点の差についてt検定を行った結果、項目④に有意差が認められ、女性の方が男性よりも高かった。また、項目②、⑦、⑪、⑱に有意差の

ある傾向が見られ、女性の方が男性よりも高かった。平均値の順位同様、「協力、協働」に関する項目に差がみられ、女性は協力しようとする意識や集団で行動するという意識が男性より強いことが影響していると考えられる。

表5 学部卒院生の男女比較

	男性			女性			平均値の差の検定	
	平均	SD	順位	平均	SD	順位	t	p<
①わかりやすい授業をする教師	4.63	0.63	2	4.76	0.43	2	-1.062	
②教職員と協力することができる教師	4.53	0.60	6	4.73	0.45	5	-1.685	0.10
③子どもとのコミュニケーションを上手にとることができる教師	4.73	0.68	1	4.76	0.49	2	-0.233	
④クラスをまとめることができる教師	4.25	0.78	13	4.65	0.48	7	-2.678	0.01
⑤学校のきまりなどをきちんと守らせる教師	4.18	0.68	16	4.11	0.77	20	0.405	
⑥魅力的な学級・学年・学校行事を計画することができる教師	4.10	0.84	19	4.27	0.73	18	-0.944	
⑦保護者と連携することができる教師	4.55	0.71	4	4.81	0.40	1	-1.958	0.10
⑧教材や指導法の研究など自ら学ぶ意欲をもった教師	4.48	0.85	8	4.62	0.59	9	-0.873	
⑨子どもの日々の変化に気づくことができる教師	4.58	0.71	3	4.65	0.54	7	-0.509	
⑩礼儀正しい教師	4.18	0.87	16	4.35	0.86	16	-0.893	
⑪だれからでも学ぼうとする謙虚さをもつ教師	4.28	0.78	10	4.57	0.60	10	-1.825	0.10
⑫子どもの人格を尊重する教師	4.55	0.71	4	4.73	0.51	5	-1.263	
⑬社会の変化にともなう教育課題に対応できる教師	4.28	0.78	10	4.49	0.51	12	-1.393	
⑭授業に全力で取り組む教師	4.33	0.97	9	4.51	0.69	11	-0.974	
⑮教職員と積極的に意見交換をする教師	4.28	0.72	10	4.43	0.90	15	-0.853	
⑯だれに対しても笑顔で明るくかかわる教師	3.93	1.07	20	4.19	0.81	19	-1.212	
⑰教育にかかわる信念を持っている教師	4.18	0.87	16	4.46	0.65	14	-1.611	
⑱子どもの成長に喜びを感じる教師	4.53	0.68	6	4.76	0.43	2	-1.767	0.10
⑲地域と連携することができる教師	4.23	0.86	15	4.32	0.71	17	-0.550	
⑳豊かな教養を備えた教師	4.25	0.67	13	4.49	0.61	12	-1.619	

＜学部卒院生の希望校種別比較＞（表6）

最後に学部卒院生を希望校種別に比較する。特別支援学校は度数が少ないため省略した。各項目の平均点の差について一元配置分散分析と下位検定（ボンフェローニ法）を行った結果、項目②は小学校は高等学校よりも有意に高く、また、小学校は中学校よりも高い傾向が見られる。項目⑦、⑬は小学校は高等学校よりも有意に高く、項目⑫は小学校は高等学校よりも高い傾向が見られる。この結果は、武田ほか(2013)が述べるように、「指導対象の児童生徒の年齢が高くなるほど、児童生徒と関わる場が少なくなること」「高等学校の教員は、生徒指導面よりも学習指導面に関心が向けられ、教員個人にかかる比重が大きいこと」「高校生は発達段階的に小中学校生と比べて人格が完成していること」が関連していると考えられる。

表6 学部卒院生の希望校種別比較

	小学校		中学校		高等学校		一元配置 分散分析	
	平均	SD	平均	SD	平均	SD	F	p<
①わかりやすい授業をする教師	4.76	0.44	4.62	0.68	4.69	0.48	0.48	
②教職員と協力することができる教師	4.82	0.39	4.52	0.63	4.46	0.52	3.53	0.05
③子どもとのコミュニケーションを上手にとることができる教師	4.82	0.46	4.66	0.72	4.69	0.63	0.60	
④クラスをまとめることができる教師	4.58	0.56	4.28	0.75	4.54	0.78	1.63	
⑤学校のきまりなどをきちんと守らせる教師	4.15	0.80	4.14	0.64	4.15	0.69	0.00	
⑥魅力的な学級・学年・学校行事を計画することができる教師	4.27	0.76	4.10	0.90	4.15	0.69	0.35	
⑦保護者と連携することができる教師	4.85	0.36	4.62	0.73	4.38	0.65	3.24	0.05
⑧教材や指導法の研究など自ら学ぶ意欲をもった教師	4.55	0.67	4.59	0.82	4.38	0.77	0.33	
⑨子どもの日々の変化に気づくことができる教師	4.67	0.54	4.66	0.72	4.38	0.65	1.03	
⑩礼儀正しい教師	4.39	0.90	4.10	0.90	4.15	0.69	0.94	
⑪だれからでも学ぼうとする謙虚さをもつ教師	4.52	0.67	4.34	0.81	4.38	0.65	0.45	
⑫子どもの人格を尊重する教師	4.82	0.46	4.52	0.78	4.46	0.52	2.50	0.10
⑬社会の変化にともなう教育課題に対応できる教師	4.48	0.57	4.38	0.82	4.15	0.55	1.13	
⑭授業に全力で取り組む教師	4.58	0.66	4.41	0.68	4.15	1.41	1.20	
⑮教職員と積極的に意見交換をする教師	4.55	0.94	4.31	0.60	4.08	0.76	1.78	
⑯だれに対しても笑顔で明るくかかわる教師	4.27	0.88	3.93	1.10	3.77	0.83	1.66	
⑰教育にかかわる信念を持っている教師	4.42	0.71	4.28	0.92	4.08	0.64	0.94	
⑱子どもの成長に喜びを感じる教師	4.79	0.42	4.62	0.56	4.31	0.85	3.38	0.05
⑲地域と連携することができる教師	4.36	0.82	4.31	0.76	3.85	0.69	2.19	
⑳豊かな教養を備えた教師	4.52	0.57	4.24	0.74	4.31	0.63	1.45	

3.2 質問2（教職員、学部卒院生）

質問2については、質問1の結果と同様の傾向がみられた。その一方で、欠損率については学部卒院生と教職員との間で大きな差があったため、表7にまとめた。

表7 質問2の欠損率一覧

	最も重要なもの	2番目に重要なもの	あまり重要ではないもの	最も重要ではないもの
学部卒院生	0%	1.3%	17.7%	15.6%
教職員	0%	4.5%	45.5%	40.9%

欠損率とは未回答者の割合のことを指す。あまり重要ではないもの、最も重要ではないものの項目に注目すると、教職員の欠損率は学部卒院生の欠損率の約3倍となっている。教職員は学校現場で働く中で様々な業務や教師としての資質能力の重要性を理解することで“重要ではないもの”を選ぶことが難しくなっていると考えられる。

3.3 質問3、4（教職員、学部卒院生、中学生）

質問3、4については、先行研究でも用いられた中央教育審議会による「教職実践演習」授業内容例の9つのキーワードをもとにした9項目（表）を参照し、筆者が分類した。分類をしていく中で、性格や人格形成に関わる項目が多く見られたため、10項目目として

「人間性」を追加した。また、分類の妥当性を確認するため、同じコースの修士1年生に協力を求め各視点の約20人分について独立して評価を行った。すると、一致率は約88%であった。一致しなかった約12%は項目1、2、6、10に集中していたため、分類基準を再検討した。(表8)

表8 質問3、4の分類に使用した項目

項目	主な内容、基準
1 教員役割	教員としての役割、職務内容、子どもに対する責務に関する項目。
2 子ども理解	子ども理解の重要性や、安全管理などの教員が担う責任に関する項目。 (子どもとの日常的なかかわり)
3 教員組織	教員組織における自己の役割や、他の教職員と協力した校務運営等に関する項目。
4 地域連携	保護者や地域との連携・協力に関する項目。
5 学級担任	学級担任の役割や実務、他の教職員との協力の在り方等に関する項目。
6 事例研究	個々の子どもの特性や状況に応じた対応に関する項目。 (いじめや不登校、特別支援教育等、今日的な教育課題に関わる子どもとのかかわり)
7 学級集団	個々の子どもの特性や状況を把握し、学級集団をまとめていく手法に関する項目。
8 授業	表現力や授業力、子どもの反応を活かした授業づくりや指導法等に関する項目。
9 学習指導案	教材研究の実施や、学習指導案の作成、教科等の(豆)知識や技能等に関する項目。
10 人間性	人格形成をしていくための過程や性格に関する項目。

<中学生> (図1)

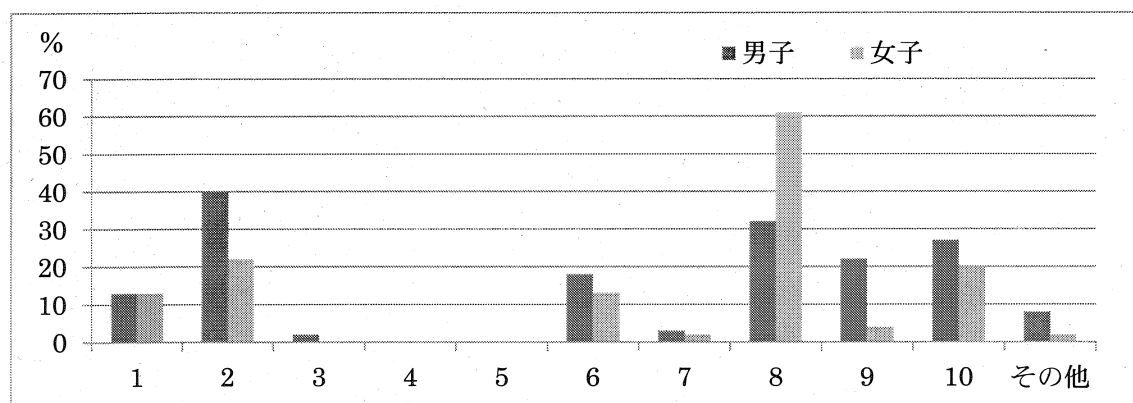


図1 質問3における中学生の男女比較

中学生の結果だが、2 子ども理解、8 授業、10 人間性の項目が男女ともにニーズが高かった。また男女共通して「優しい」「叱ってくれる」といった記述が目立った。児玉(2015)は「大学生は、教員と生徒との『けじめ』を求めている」と述べているが、「優しい」「叱ってくれる」といった、相反するものを中学生が求めていることから、中学生も大学生同様教師に対して『けじめ』を求めていることが分かる。

次に男女別で比較すると、2 子ども理解や、10 人間性、9 学習指導案の項目について男子のニーズが高いことから、男子は豆知識等を取り入れた面白い授業をしてくれる教師、人間的に見本になる身近な大人の一人としての教師を求めていると考えられる。一方女子

は、教師の人間性も求めているが、8 授業の割合が 60%を超えていることから、教師には分かりやすく面白い授業を何よりも求めていることが分かる。

＜学部卒院生、教職員＞（図 2）

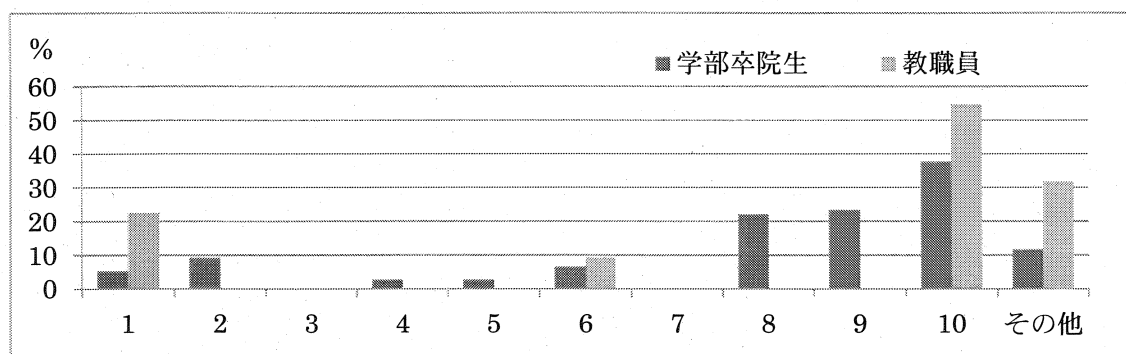


図 2 質問 3、4 における学部卒院生と教職員の比較

学部卒院生、教職員の結果だが、2 子ども理解、8 授業、9 学習指導案の回答数に大きな差異があった。一方で 10 人間性のニーズがともに高いことは共通していた。教育者としては何より人間性が重要であると学部卒院生、教職員ともに理解していることをこの結果が示しているであろう。その他の回答についてだが、学部卒院生は“教養”等の言葉を用いた、教職全般の内容を指す回答や、批判的な思考を持つ、様々な人と出逢う、価値観を見直す、知見を広げるといった回答が目立った。教職員は健康管理、リスクマネジメント、行動力、計画力といった、学校現場に入ってから養う必要のある内容を回答していた。

＜教職員、学部卒院生、中学生＞（図 3）

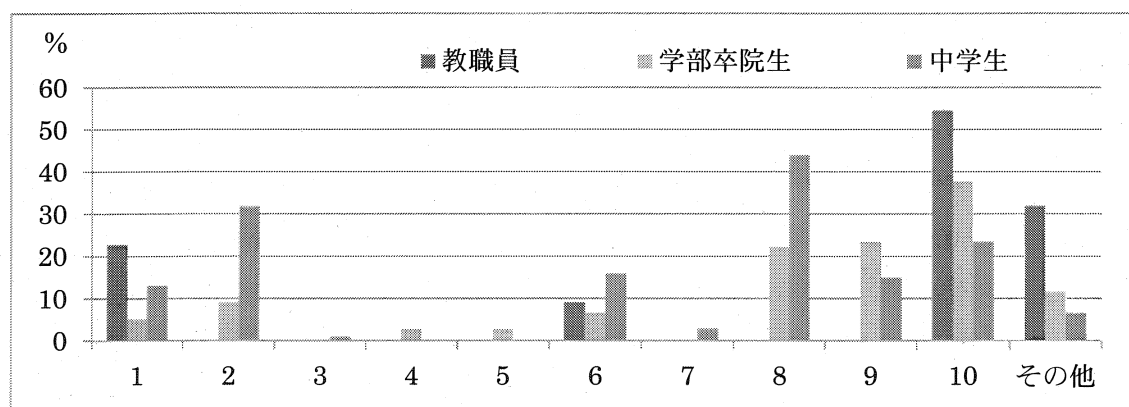


図 3 質問 3、4 における教職員、学部卒院生、中学生との比較

最後に、教職員、学部卒院生、中学生の結果を比較する。今回のアンケート調査では唯一 3 つの視点を同時比較できる質問内容である。それぞれの傾向を見ると、教職員は 1 教員役割、6 事例研究、10 人間性、その他に関する記述のみがみられ、10 人間性の記述は全体の約半数を占めた。学部卒院生は多くの項目に関する記述があるものの、8 授業、9 学習

指導案、10 人間性の 3 項目に記述が集中している。中学生は主に 2 子ども理解、8 授業、10 人間性に関する記述が目立った。

このような結果の中大きな差異が確認できる項目としては、2 子ども理解、8 授業、9 学習指導案、10 人間性が挙げられる。2 子ども理解、8 授業、9 学習指導案の 3 項目については学部卒院生、中学生の記述が多く見られたが、教職員の回答では全く見られなかった。10 人間性については教職員の記述が圧倒的に多かった。

これだけ大きな差異が確認できる要因としては、「学校は何をする場所か」という考えが教職員、学部卒院生、中学生それぞれ違うからであると考えられる。まず中学生からみると学校は勉強をする、友達や先生と関わる事が中心の場所であり、子ども理解や授業、教師の人間性の記述がほとんどなのは当然の結果といえる。次に学部卒院生は、実習や大学院での学びから、授業や教師の人間性が特に重要であると考えつつも、学校現場での業務の多様性を知ったため、記述がそれぞれの項目に分かれたと考えられる。最後に教職員は学校現場での業務の多様性を知りつつも、教師として最も重要なことは授業でも子ども理解でもなく、教師の人間性であると考えているのであろう。

4.総合考察

本研究では、教師のあるべき姿について「目指す教師像についてのアンケート」と題し、アンケート調査を実施し、その結果を基に考察を行った。アンケート調査の結果、質問 3、4 の結果で挙げた通り 2 子ども理解、8 授業、9 学習指導案、10 人間性の 4 項目のニーズについて、教職員、学部卒院生、中学生の間で大きな差異がみられた。

差異がみられた一方で教職員、学部卒院生、中学生の共通点はないのだろうか。質問 1、2 では、教職員は計画することの重要性や学び続ける必要性を学部卒院生よりも感じていることが分かった。質問 3、4 の自由回答からは中学生には性差はあるものの、「大人の見本となるような教師」を求めていることが分かった。さらに教育者としては何より人間性が重要であることを学部卒院生、教職員ともに理解していることが分かった。視点別や男女別、校種別にみると差異はあるものの、教職員、学部卒院生、中学生の理想とする教師には特に「教師としての総合的な人間力」が共通していることが分かった。

「教師としての総合的な人間力」は、社会の急激な変化に併せて、求められるものが自然と変わっていくと考えられる。具体的には質問 3、4 の記述にもあった企画力、計画力を例とした、多くの「～力」と呼ばれる能力が現代の社会、また学校現場で求められるも

のに該当するだろう。「教師としての総合的な人間力」を形成していくためには、教師としてそれぞれが揺るぎない軸を持ちながらも、社会の急激な変化に併せて様々な人やモノに出逢い、様々なことを経験し、価値観や意見をぶつけ合うといったことを日常的に行うことが必要である。教職員は全ての項目を重要と考えているが、自由記述では人間性に関する記述が大半だったため、授業や子ども理解は人間性に比べると優先されていないと考えられる。教師と大学生や子どもが考える教師像に差異があることを理解し、大学生や子どもは持っているが、教師が重視していない教師像の存在つまり優先されていないものに留意しながら“学び続ける”という意識を持つことが重要である。

5. 引用・参考文献

- 1) 小柴孝子・武田明典・村瀬公胤(2014)「中・高校生が求める理想の教師像-「教職実践演習」カリキュラム開発のために-」, 神田外語大学紀要第 26 号.
- 2) 児玉祥一(2015)「求められる教師と理想の教師像-同志社・京都教育大学教職大学院での教職の授業を通して-」, 同志社大学教職課程年報(5), pp76-88.
- 3) 武田明典・村瀬公胤・八木雅之・宮木昇・嶋崎政男(2013)「教職実践演習のカリキュラム開発-初任教員のニーズ調査-」, 神田外語大学紀要, 25, pp307-330.
- 4) 千葉市教育センター(2010)「教師力に関する研究授業の達人から学ぶ」, 千葉市教育センター教育研究部門発行.
- 5) 豊田 弘司・三木 馨(1996)「理想的教師像における大学生と教師の違い」, 奈良教育大学教育研究所紀要平成 8 年第 32 号.
- 6) 文部科学省 中央教育審議会答申(2012)「教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策」
- 7) 山根文男・古市裕一・木多功彦(2010)「理想の教師像についての調査研究(1) - 大学生の考える理想の教師像 -」, 岡山大学教育実践総合センター紀要、第 10 巻, pp63-70.
- 8) 山根文男・木多功彦(2013)「理想の教師像についての調査研究(2) - 学校長等のインタビューから -」, 岡山大学教師教育開発センター紀要, 第 3 号, pp. 90-97.
- 9) 渡辺克己(2011)「教員養成の充実に関する一考察-期待される教師の育成を目指して-」, 北里大学一般教育紀要, 16, pp126-136.